

太神宮 あちこち

第2回 月夜見宮

神宮司庁 広報課長 石垣 仁久
神宮権禰宜

今回は月夜見宮を紹介しま

す。月夜見宮は四所ある外宮の別宮の一つです。創建年代は不明ですが、平安時代に編纂された『止由気宮儀式帳』に、外宮が管理する度会郡内の神社二十四社の筆頭に「月読神社」として挙げられています。つまり、平安期は既に外宮第一の摂社であったことがわかります。内宮の別宮月読宮と名称が似ていますが、月読神社は外宮の摂社ですので所属と社格がまったく異なる別個の神社です。

鎌倉時代の承元四年（一一二〇）外宮からの奏請により撰社月読神社に朝廷より宮号宣下があり、別宮に昇格して月読宮となりました。その後、長らく内宮の月読宮と同名のままでしたが、一方は内宮、一方は外宮と所属が異なっていたので特に不都合は無かったようです。

降って、江戸時代に内宮の月読宮と区別するため、新月

読宮の俗称が生まれました。

名称の問題は、明治初年兩大神宮が神宮司庁の一括管轄となった際、外宮の別宮を月夜見宮とすることで解決しました。これは二宮が同名であるので区別したままで、それ以外の理由は存在しません。

月夜見宮の祭神は月夜見尊と月夜見尊荒御魂で、この神は男神です。『万葉集』には月読壮士という用例もあります。

内宮の月読宮は月読尊、隣接する月読荒御魂宮に月読尊荒御魂が別に祀られています。月夜見宮は一つの御殿に月夜見尊と荒御魂がお祀りされています。前述の『儀式帳』に「正殿二区、玉垣二重、御門一間」とありますので、撰社の時から同じ御垣の内に荒御魂を祀る小殿が別にあつたようですが、何時の頃からか合殿となったようです。

祭神名の表記について、月

読尊の表記法は『古事記』に拠り、月夜見尊は『日本書紀』に拠ります。文字は異なりますが、同じ神様です。神宮ではツキヨミと申し上げますが、一般にはツクヨミとよみます。月の下に他の名詞が付くと、キガクに交替してツクヨミとなります。こちらの方が古い読み方らしく、東国方言にも例があります。

また、『日本書紀』には月読尊の表記も見られます。この用例は、三日月の形が弓に似ていることか、または楓弓（楓は弓の適材）との関連も考えられます。

さて、月を読むとは、月齢を知ることです。「読む」には「鯖を読む」というように、数える意味もあります。月齢を読むことは、日を数え月日の運行を知ること、暦の無い時代に月日を知ることが重要なことでした。また、月齢から潮の干満も知り得ますので、月の神は、船を操る人々に守護神として祀られる例が見られます。

神宮でも、河川との関係が考えられる佐八の撰社川原神

社と、月夜見宮域内の撰社高河原神社にもツキヨミの神の御魂が祀られています。また、月夜見宮と月読宮は現在では河川とは縁の無い場所にあります。かつては河川が宮域の側を流れていました。特に月夜見宮の背後の渠道は、かつて宮川本流であった清川が形成した自然堤防で、高川原の地名があります。そこには齋王が三節祭を奉仕する際の宿泊所となる離宮院が在りましたが、延暦十六年（七九七）小俣に移転しました。

移転の理由が「南北の川氾濫」とありますので、地形としては川に挟まれた水運の便が良い地であつたと考えられます。

つまり、高川原は古代水上交通の要所で、そのため度会の駅として勅使が到着する駅使院もありました。『延喜式』（巻第二八兵部省）に、度会駅には駅馬八疋を置くことが定められています。

月夜見宮から外宮に通じる神路通りには、謎めいた白馬伝説がありますが、その起源は古代の駅制にまで遡るのかも知れません。

敬称略

納税表彰式

おめでとございます



磯部建設工業(株)

平石 紀久子

平成二十七年度の納税表彰式が、十一月十三日（金）、伊勢シティホテルで執り行われ、女性部会から平石紀久子さんが、伊勢税務推進協議会長表彰を受賞されました。

はつらつ 新入部 会員紹介



● 安田 幸枝（鳥羽支部）

日本生命保険(株)

鳥羽営業部

● 米田真奈美（明倫支部）

(有)足立システム

平成27年11月30日現在